

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

コミュニケーションの仕方、質が劣化しつつある。ことばを用いつつも、実は言語本来の使用の方法からはずれた、サル的なスタイルへと先祖返りしつつある。それがひいては、「ギレ」やよい人間を生み出す土壌となっている——というのが本章のテーマである。

こう書くと、そんなバカなと思われるかもしれない。サルのようにコミュニケーションをはかっているといっても、ちゃんとことばを使っておしゃべりしているではないか、サルのように「キヤー」とか「ワアー」とか意味不明の雄たけびを出しているばかりでない、と。

だが話はそう単純ではない。なるほど人間は、あくまでも言語を使って会話しているわけで、サルとは異なる。しかし、それだけで「言語的」な意思疎通をしているといいきれるかという^Aと、そうとは限らない。

例えば、「電話」と子どもが親にいった場面を想定してみよう。これは、立派な一語文である。ただし、その意味はさまざまに解^{トク}可能だ。「電話に出て」「電話をかけて」といった、話し相手への要求とも取れる。他方、「今電話で話している最中である」という叙述文としても、理解することができよう。では、どちらが正しいのか？

それは、「電話」という字面からでは判別できない。ふつう私たちは、発話の意味を把握しようとする際、言語の情報を手がかりに、推論によって相手が何を伝えたいのかを推しはかるのである。「で・ん・わ」という音の組み合わせ以外の手がかりとして、イントネーションや声の調子、また音声要素だけにとどまらず、顔の表情やジェスチャー、今、話がなされた場の状況などの要因を斟酌^{しんしやく}する。加えて、過去の記憶から話し相手に関する知識なども引き出して、総合的に相手が何を伝えたかったのかを判断するのである。

これは、いわれてみれば当たり前のことに違いない。しかし一般に言語というのは、たいへんシンボル性の高い記号である

なされている。ひつきよう言語的コミュニケーションというのは、記号性の高い情報の伝達手段と受けとめられがちであるが、その記号の指示する意味の適切な解釈を支えているのは、全然記号的でない側面なのである。

それどころか、記号を字義通り記号として解読することは、およそ非人間的な意味理解であることが、最近の研究から明らかにされつつある。というのも、人間以外の霊長類の行う音声コミュニケーションこそ、まさにそれ^Bにあたるからにほかならない。

サルにおいても、人間の言語体系における単語のようなものの存在は決して珍しくない。人間に系統的にもっとも近い霊長類というと、チンパンジーに代表される類人猿であることは周知の通りである。逆に霊長類として進化的にいちばん下等なのは、原猿と総称されている。マダガスカルに生息しているキツネザルが典型として、よく知られている。

ところが、そのキツネザルにすら、「ことば」もどきは存在する。例えば彼らの天敵にあたるような捕食動物が近づいてきた場面を思い描いてみよう。そういうとき彼らは独特の声を出す。この声を耳にすると、周辺にいる仲間（同種個体）はただちに自らの身を守る防御反応を行う。結果として群れに危険の接近を周知する機能を実行しているところから、警戒音と命名されている。

ただし、天敵の種類はさまざまである。大別しても、空からやって来るものと、地表から来るものがある。それによって防御の手段の講じ方も、おのずと異なってくる。空からの場合は、地表近くへ身を伏せた方がよい。だが、もし地表から危険が迫ってきているのに、空からのときのように逃避を企てると、とんでもないことになる。

そこで淘汰圧^{とうたあつ}が働き、キツネザルは複数のタイプの警戒音を出すにいたったのだった。例えばAとBという二種類の声が存在するとしよう。空から捕食動物がやってくるとAの声を出す。すると、聞いた仲間は地表へ逃げる。他方、地表から敵が来るとBの声を出す。その際は、仲間は木の上へと逃れる。

AもBも、警戒警報である。**C** Aは空からの危険、Bは下からの危険を意味している。これは、ほとんど単語による表現に近い。そういう観点では、彼らも記号的コミュニケーションを行っていることになる。

それどころか、彼らの方が人間よりも、厳密に仲間の発する音声を記号的にとらえているのである。ヨーロッパの昔話で、いつも「狼が来た」とウソを村人に伝えて驚かせては喜んでいた少年の物語というのをご存知だろう。村人たちは、はじめは信

じこんでびっくりしていたが、そのうち誰も信じなくなった。あげくのはてに、本当に狼が来ても誰にも助けてもらえず、羊を食べられてしまった少年のエピソードである。

ああいうことは、キツネザルでは起こらない。彼らだったら極端なケースとして、一〇〇万回「狼が来た」といわれても、やはり逃げることだろう。警戒音の認識に、音以外の手がかりは介入しない。ともかく身の危険にかかわることだから、少々いかわしい情報であつても、とりあえず信じた方が安全、という発想が働く。サル^Eの理解の仕方は、柔軟性に欠けるのだ。

「柔軟性を欠く」と書くと、融通がきかず頭が悪いみたいに聞こえるかもしれない。D シグナルの記号としての意味作用に忠実であるという意味では、人間より抽象度の高い認識を行っていると言い換えることもできないのではないだろうか。

人間は、過去の経験にもとづいて、ことばの意味理解を変えていく。反対にこのことは、発話を行う側も、常に相手に聞き入れてもらえるよう配慮して話をすることを意味している。そして、聞き手は相手がこちらを意識して話をしていることに気づいている以上、その意図を把握しつつ、発話内容を吟味する。

(中略)

つまり言語理解というのは、意外なほど記号的でなくて、反対に相手の心を読む（発話を手がかりに心理を推測する）過程であることがわかる。むしろサルの方がよっぽど厳密に記号類別に依拠して情報伝達を行っているのだ。

ところが、最近の日本人を観察してみると、そのコミュニケーションはこの言語進化の進んできた方向を逆行しているように思えてならない。つまり、ことばのメッセージを常に記号として把握する傾向が高まっている。そして、そういう認識の仕方をサルが実行している以上、サル^E的な方向へとコミュニケーションのスタイルを変えてきたという結論にたどりつくのだ。

少しむずかしく書くと、今まで述べてきた、いわゆる人間独特の言語による意思疎通はふつう、「意図明示的で推論的なコミュニケーション」と呼ばれている。「意図明示的」というのは、言語のような、指し示す対象と記号との関係が恣意的であるシンボルを媒介にして、伝達の意図があることを話し手が聞き手に明らかに示し、そのことで相手の注意をひいてますよ、ということである。

「推論的」というのは、記号そのものが指示するのみでは伝えきれない内容を、聞き手が推論して補ってやらないと、適切に情報

の授受ができないということを意味している。注意を話者に向けるように仕向けられた聞き手は、耳にしたことばを実はほんの手がかりにしているにすぎない。そこを突破口にして、話し手が意図した解釈にたどりつくべく推論して初めて、言語的コミュニケーションは成立するのである。

この人間が行う推論過程の原理やメカニズムを解明することの重要性は、ことばを扱う科学の中でも、ごく近年、認識されはじめたばかりである。そういう言語科学の中の領域は、語用論と呼ばれるようになってきている。

そして、語用論研究によって初めて認められるにいたった、ことばを理解する上での人間の能力は、語用論能力という名称で知られるようになってきた。これは人間の行う認知情報処理の中の発話解釈に関与する側面に対応する。

こうみてくると、昨今の日本人のコミュニケーションの特徴である「サル化」とは、すなわち語用論能力の衰退と表現することができる。そして、その傾向の背景としては、社会のIT化、人間同士の情報伝達がケータイのような代物しろものへの依存度を大きく増したことが考えられるのだ。

メールのやり取りを通じて、何がしか特定のテーマについて議論をたたかわせたことがある人なら、誰でも気づくことだと思うのだが、主張Fを交換するにつれて、意見のくい違いによって話し合っている主題からそれていくことが往々にしてある。あるいは感情的なもつれや、枝葉末節についての詮索せんさくが起ころうとも珍しくない。

話が堂々めぐりしたとする。一方がAといい、他方がBと応ずる。それにまたCと答え、それに再びDと反応したとしよう。やり取りが二度ぐらいだと齟齬そごは少ないのだが、三度目に一方がEと主張すると、それに対し、相手が「あれ、Eとあなたはいつてるけれど、前はCと主張した。EとCとは論理的整合性がないのでは……」という応答が、必ずといっていいほど生じてくる。

すると一方は、「いや、Cといったのは、あなたの受けとったような意味なのではなくて、Bというご意見に対し、かくかくしかじかのニュアンスで述べたにすぎない。それは誤解だ」と反応したとする。するとさらに他方は、「いや私がBといった意図は、あなたの考えているのとは異なっていた……」というふうに、交換した発言内容をめぐって堂々めぐりが始まる。そして、あげくのはてに「いった、いわない」の水かけ論に発展し、双方とも疲弊する。

どうしてもこんなことになるかという、画面上の字面だけでメールのメッセージとしての意味をとらえていると、どうしても書き手の意図が発話の際ほど忠実に読み手に伝わらないからだと、考えざるをえなくなる。

一回一回のメッセージに関してみると、理解のズレはさほど大きくないらしい。ただ、少し角度がくい違っているだけでも、何度も意見をキャッチボールしていくと、そのギャップはどんどん大きくなってしまふ。あげくのはてに、「ズレている」と気づいたときは修正がむずかしくなってしまうている、ということのようなのだ。これはメールの使用者が、十全な語用論能力を所有していたとしても、不可避なことであるらしい。

パソコン通信の歴史をふり返ってみると、当初、人々はこの危険に無防備であつた。結果として大多数のメール使用者が、同じようなトラブルに巻き込まれ、痛い目に遭つたと思われる。

そこで対策が講じられるにいたる。具体的には、独特のアイコン (icon) を開発し、文字によるメッセージに適宜、挿入するという手法が発達した。典型的には、顔の表情を模したものがそれである。

ケータイメールで、「かお」と文字を入力し、変換させてみよう。^G「顔」といった漢字とは別に、ほとんど無数ともいえるアイコンが出てくるに違いない。私のケータイでは、二六通りにのぼる (中略)。

これらを適宜みつくるって、文中・文末に挿入することで言外の意を表現するようになってきた。スマイルの表情など、もっとも頻繁に用いられる一つだろう。ちよつと皮肉っぽい文を書いたあとにつけたりする。

皮肉を書いているんだけど、悪意はありませんよ、ほんの冗談ですよ、ということを伝えたいのだ。そうしないと、真に皮肉つていられると思われて、人間関係をこじらせるのではという、送り手の推測からの付加である。

(中略)

これは、いかにも現代日本的な表現方法であるようだ。私見であるが、欧米ではこのようなアイコン使用はほとんど見られないという印象を強く持っている。周囲の知人に尋ねてみても、スマイルアイコンを使うアメリカ人がいるという例が、一件あつただけだった。メールの使用は日本より盛んであるのに……。

意味が多義的に取れる文を送って、冗談ですよというとき、文末にかっこをつけ、中に laugh とか smile という文字をはさむというケースはある。これは日本でも従来、座談などを記録する際に、(笑) などのようによく用いられてきた表現方法である。しかし、これはあくまでシンボルによる情報の付加にとどまっている。

H、顔マークがユニークなのは、もう言語という抽象的表記スタイルを捨て去ったという点にあるだろう。人間の表情を直接に具象化して用いている。アイコンと呼ばれるのは、シンボルと異なり、指示対象と記号との対応が恣意的でないからにほかならない。スマイルマークは無条件に好意の表れであって、これを悪意の表明と関係づけることは絶対にできない。シンボルより、一段レベルの低い次元で認知情報処理される代物にはかならない。

そして現代日本において、人間はシンボル使用に踏みとどまって、メッセージのやり取りを交わすのを放棄し、一レベル水準を下げたやり方へと移行を始めたのである。くり返すが、メールというコミュニケーションツールが最初に開発されたのは、欧米においてである。ケータイメールが普及しているのは日本ばかりでなく、むしろ世界でもっとも普及しているのは北欧である。それなのに、アイコンは日本人のみが多用している。そこには漢字文化の影響もあるだろう。しかし、コミュニケーションは確実にサドル化の方向へ向かいはじめた気が私にはする。

むしろこういう考えに異議があることは百も承知である。欧米の言語体系に含まれているのは、原則としてすべて表音文字である。それに対し、日本人は表意文字を多用する。漢字は一つ一つが固有の意味を持ったシンボルとみなすことができる。だが、それらも、もとはといえば対象の形状を模したようなアイコンから誕生したものが大半だ。そういう文字に慣れたしんでいるから、顔アイコンのようなものが誕生したと考えられなくもない。それをコミュニケーションの低次元化と一概に呼ぶのは、暴論という意見もあるだろう。

なるほど、最初に新たな記号を思いつくのに¹ どじょう 土壌が関係したことは、まちがいないだろう。しかしである。それだけで、ここまでアイコンの使用が流布したとはやはり考えにくいのではないだろうか。

(正高信男『考えないヒト』中央公論新社 二〇〇五年より引用 問題作成上一部変更)

問一 傍線部A「そうとは限らない」と筆者が考える理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番

号は 1。

- ① 人間は言語の情報を手がかりに相手の伝えたいことを推測することでコミュニケーションをとるから。
- ② 人間は言語だけでなく、過去の記憶から相手に関する知識がないとコミュニケーションをとることができないから。
- ③ 人間は言語と顔の表情やジェスチャーの斟酌だけでコミュニケーションをとるから。
- ④ 人間は雄たけびではなく、言語を使ってコミュニケーションをとっているため、動物とは異なるから。
- ⑤ 人間は雄たけびをあげること、コミュニケーションをとることができるから。

問二 傍線部B「それ」が指示する内容として不適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は 2。

- ① 音声の意味の認識に音以外を介入させないこと。
- ② 音声を記号的にとらえること。
- ③ 記号を一義的にとらえること。
- ④ 記号の意図を把握して吟味すること。
- ⑤ 記号の意味作用に忠実であること。

問三 次の空欄部 C、D、H に入る語句として最も適切な組み合わせを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答

番号は 3。

- | | | | |
|---|--------|--------|-----------|
| ① | C..しかし | D..つまり | H..それに対し |
| ② | C..ただし | D..しかし | H..それに対し |
| ③ | C..ただし | D..つまり | H..言い換えると |
| ④ | C..または | D..しかし | H..反対に |
| ⑤ | C..または | D..つまり | H..言い換えると |

問四 傍線部 E 「サルのな方向へとコミュニケーションのスタイルを変えてきた」と筆者が考える理由はなにか。次の形式に従って三十五字以内で記入しなさい。ただし、「ケータイ」「語用論能力」という二語を必ず用いること。

解答番号は 国語解答用紙。

日本人のコミュニケーションは、三十五字以内にあるため。

問五 傍線部F「主張を交換するにつれて、意見のくい違いによって話し合っている主題からそれていくことが往々にしてある」

とあるが、筆者がこのように考える理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 4。

- ① メールのやり取りは書き手の意図を忠実に読み手に伝えるため。
- ② メールを書き手は語用論能力をもっていないため。
- ③ メールは発話よりも書き手の意図を伝えないため。
- ④ メールは発話よりも語用論的な意図を伝えるため。
- ⑤ メールに書くことは発話より難しいため。

問六 傍線部G『顔』といった漢字とは別に、ほとんど無数ともいえるアイコンが出てくるに違いない」とあるが、日本人がアイ

コンをメールに挿入する目的は何か。本文の内容に即して最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番

号は 5。

- ① 意味が多義的にとれるようにするため。
- ② 意味はなく単なる記号を表すため。
- ③ 言外の意味を言葉に付け足すため。
- ④ 送り手の感情だけを相手に伝えるため。
- ⑤ 聞き手の推測に対する補足を行うため。

問七 傍線部Ⅰ「そういう土壌」という言葉が指し示している内容として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

| |
|---|
| 6 |
|---|

。

- ① 漢字はそれぞれ音素や音階を表すものであり、日本人は指示対象と漢字が直接的に対応することに違和感がない環境にあること。
- ② 漢字の多くは対象の形状を模すことで作られたので、日本人は指示対象と記号とが直接的に対応することに違和感がない環境にあること。
- ③ 漢字はそれぞれ固有の意味を持ったシンボルとみなせるので、日本人は指示対象と漢字が直接的に対応しないことに違和感がある環境にあること。
- ④ 日本語には様々な意味が含まれるため、日本人は指示対象と漢字が直接対応しないことに違和感がない環境にあること。
- ⑤ 日本語には様々な意味が含まれるため、日本人は聞き手にその意図を正確に伝えたいという願望をもつ環境にあること。

問八 次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

7

9

1 高等裁判所の判決を不服として、最高裁にコウコクをした。

7

- ① 広 ② 抗 ③ 公 ④ 興 ⑤ 皇

2 アスリートに対するSNS上でのチュウシヨウが問題となっている。

8

- ① 象 ② 小 ③ 傷 ④ 焦 ⑤ 省

3 政府は今回の記録的大雨についてゲキジン災害に指定した。

9

- ① 甚 ② 陣 ③ 人 ④ 仁 ⑤ 腎

問九 次の問いに答えなさい。解答番号は

| |
|----|
| 10 |
|----|

 ～

| |
|----|
| 12 |
|----|

。

1 次の空欄部「 」に入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

| |
|----|
| 10 |
|----|

今、手許に五つの宝石を持っているとする。このとき、「宝石を五つも持っている」と考える人と、「宝石を五つしか持っていない」と考える人がいる。前者の考え方をオプティミズム（楽観主義）というが、後者の考え方を「 」という。

- ① アイデンティティ
- ② カタルシス
- ③ デカダンス
- ④ トラウマ
- ⑤ ペシミズム

2 次の四字熟語とその意味の組み合わせとして不適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

11

① 東方西走 ― 一日が非常に長く感じられること。

② 我田引水 ― 自分に都合のいいように言ったりすること。

③ 朝三暮四 ― 目の前の違いに心を奪われて、結果が同じになることに気が付かないこと。

④ 朝令暮改 ― 命令や方針が頻繁に変わって定まらないこと。

⑤ 馬耳東風 ― 他人の意見や忠言にまったく反応せず、聞き入れないこと。

3 パラドックスの意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

12

① 二つの相反する事柄の板挟みになること。

② ある物事について、他と比較したときに見られる違い。

③ ある物事についての、こうあるべきだという根本の考え。

④ 解きたい矛盾を抱えた表現や事態。

⑤ 納得性のある推論を行うこと。

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

第二次世界大戦後、全体主義の価値観・社会規範を受け入れていた敗戦国の人々は、信じていた価値観の崩壊によって、再び深刻なニヒリズムに陥った。また戦勝国にしても、先の大戦以上の大量殺戮^{さつりく}を眼にし、それまでの価値観が大きくゆらいだことに変わりはない。

このニヒリズムの新たな受け皿になった価値観、思想はさまざまだが、^A何といってもマルクス主義の影響力は大きく、歴史上類を見ないほど広範にわたっていた。それは、革命を経て社会主義国になった旧ソ連や東欧圏だけでなく、資本主義諸国の人々をも魅了し、世界規模の運動にも発展していった。なぜならマルクス主義は、貧困や生活苦、戦争といった諸問題が、すべて資本家と労働者が対立する資本主義国家の矛盾によるものだ^{と説明し、誰もが平等な社会主義の体制に変えれば、国家間の紛争も貧困などの生活苦も解決する、と主張したからだ。}それは戦争に疲弊し、貧困に喘^{あえ}いでいた人々にとって、大きな希望となったのである。

しかし、一九六〇年代に頂点を迎えたマルクス主義への熱狂も、七〇年代後半になると退潮の兆しを見せはじめた。その理由は二つある。

ひとつは、マルクス主義を実践した社会主義諸国において、多くの矛盾が生じている事実が広く知られるようになったこと。一九五六年、フルシチョフによってスターリンの大粛清が暴かれて以来、「プラハの春」(六八年のチェコスロバキアの改革運動)に対するソ連の侵攻、中国の文化大革命(六〇年代後半)、中ソ紛争(六九年)、カンボジアにおける大虐殺(七六年)など、絶え間ない粛清と虐殺、侵略、戦争は、資本主義諸国の人々に大きな失望を与えることになった。そして八〇年代にソ連を中心とした東欧圏の社会主義国家が次々と崩壊したことで、多くの人にとって、もはやマルクス主義は過去の理想と化してしまった。

もうひとつの理由は、先進資本主義諸国においては高度消費社会が実現し、多くの人が豊かな生活を享受できるようになったことだ。貧困を脱した人々にとって、社会の抑圧感はなくなり、社会を変革する必要性は消失した。革命は豊かな生活が崩れるリスクさえ感じさせるものとなった。そのため、マルクス主義による理想社会の夢は掻き消されたのである。

だがさらに重要なのは、こうした高度消費社会の実現、つまり豊かな生活の実現によって、個人が各々の価値観を信じて自由に生きる可能性が大きく広がった、という点にある。このことはマルクス主義を信じているか否かにかかわらず、とても大きな意味を持っていた。

貧しければ、嫌な仕事でも辞められず、余暇を楽しむ余裕もなく、日々の暮らしかで精一杯になるだろう。だが金銭的にも時間的にも余裕ができれば、自分なりの思考や感性に基づいて、やりたい仕事を選んだり、仕事以外の楽しみを見出すことができる。つまり、より自由に生きることができるのだ。一方では、都会へ働きに出た大勢の人々は、地域共同体との関係が希薄になり、伝統的な価値観の桎梏しごくは弱くなるため、また都会の新しい価値観にも触れることで、自分なりの生き方を模索しはじめた。

こうして伝統的価値観が崩れて個人主義が強まると、ライフスタイルは多様化し、人それぞれの価値観を許容しあうようになる。その結果、価値観の相対化はますます広まり、自由に生きられるようになる一方で、自分なりの価値観を持ってない人々は、生の意味を見失い、深刻なニヒリズムに陥ってしまう。そして自分の存在価値を確認するために、他者の承認を過大評価しがちになる。

これは先進資本主義諸国に共通する傾向と言っていいたいだろう。無論、消費社会化の進展、伝統的価値の崩壊の程度、マルクス主義の影響力の強さなどによって、国ごとに微妙な違いはある。しかしそれでも、資本主義の進展によって高度消費社会が成立し、民主主義と個人主義の浸透とともに個人の自由が尊重されるようになれば、遅かれ早かれ、こうした状況が訪れる。

それは、近代社会が自由を実現する上で、避けてとおることのできない問題なのである。

日本もまた、現在、豊かな社会が実現して自由な生き方が可能になっているが、その反面、相対主義とニヒリズムが広まっている。それは長い目で見れば、明治以来の近代化によるものだが、より直接的な影響という点では、高度経済成長を挙げることができ

る。
日本は第二次世界大戦の敗戦によって、天皇への崇拜、国家の繁栄に対する希望など、それまでの価値観は大きくゆるがされたが、新たな「大きな物語」が登場し、敗戦によるニヒリズムを払拭することができた。

まずマルクス主義と戦後民主主義が知識人層の新たな価値観となり、一九六〇年代には全共闘を中心に大きな社会運動にさえ発展している。その一方で、がんばって勉強をして大学に行き、都会に出て仕事をすれば、貧しい生活から脱し、欧米（特にアメリカ）並みの生活を手に入れることができる、という「大きな物語」も信じられていた。それは、車、テレビ、冷蔵庫、洗濯機、クーラーなどがある、便利で快適な生活であり、綺麗な服きれいなで着飾った、都会的でおしゃれな生活への憧れでもあった。その実現に可能性を与えていたのが、高度経済成長である。

しかし一九七〇年代の半ばには、状況は大きく変化する。高度経済成長の時代が終わり、憧れていた豊かな生活が実現するようになったからだ。

生活が豊かになれば、社会を変革する必要性は感じなくなってしまう。それに加え、連合赤軍によるリンチ殺人や浅間山荘事件の実態を目の当たりにした知識人や学生は、マルクス主義に失望し、そこに理想を見出すことができなくなった。また豊かな生活は、実現されてしまえば、もはや憧れの対象ではなくなり、がんばっていい生活を手に入れる、という希望も消えてしまう。

こうして、戦後、大きな影響力を持ち続けた価値観は崩壊し、豊かな生活への夢は消失した。また、多くの人々が都会へ出て働き、核家族を形成して新しい生活をはじめたため、地域共同体や大家族は解体し、伝統的な価値観も急速に失われつつあった。このことによって、社会共通の価値観、「大きな物語」は歴史の舞台から姿を消し、個人主義と価値観の相対化が社会全体に浸透していったのである。

一九八〇年代に高度消費社会に突入すると、多くの人々は生活にゆとりが生じ、個人は自分なりの価値観で自由に生きればよい、という考えも広まった。こうした価値相対主義の進展を後押ししたのが、ポストモダンと呼ばれる現代思想であった。その代表格であるフーコー、ドゥルーズ、デリダといった思想家たちは、絶対的な価値観は存在しないと主張し、特定の価値観に偏る危険性について、周到な論理で説明してみせたのだ。

確かに社会に共通する価値観が存在しなければ、自由に生きる上で制約が少ないだろう。そのため、価値観の相対化はおおむね好意的に受け止められてきた。しかし一方では、何をすれば周囲に認められるのか、生きている意味を実感できるのか、その方向

性が見えなくなるのも事実だ。すなわち、ニヒリズムと承認不安の蔓延まんえんが懸念される。

特にバブルの崩壊以降、豊かな生活さえも危うくなったことで、この不安はより一層深刻なものになっている。なぜなら、就職がままならないフリーターや派遣社員の人々は、職場の集団的承認が十分得られないだけでなく、結婚によって親和的承認を得ることも難しいからだ。

このように、現在、承認不安は社会全般に広まり、深刻な苦悩をもたらしている。社会共通の価値観が失われたことは、ある意味では自由の可能性を拡大し、もはや自由は社会を変革して勝ち取るようなものではなくなった。しかし同時に、周囲の承認を得るための規準も見失ってしまった。そのため多くの人々は周囲の人間に同調しがちになり、過度に気を遣うあまり、自由であるはずなのに一向に自由を感じることができない。自由という大海のなかで羅針盤を失い、さまよい続けている。

こうして、近代社会が生み出した「自由と承認の葛藤」は、現代において新たなステージに移行した。それは自由が拡大する一方で、承認を得る可能性が狭くなり、じわじわと承認不安が満ちてくる、といった現象として捉えることができる。現在の日本社会は、こうした傾向が顕著に現われているのである。

近代になって「自由と承認の葛藤」が生じたとき、最初に「個人の自由」と葛藤していたのは、「社会の承認」であった。

近代以降、少しずつ自由に生きる条件が整い、また自由の意識が浸透しはじめると、ただ社会の要請に従って生きることが、自己不全感をもたらすようになった。しかし、社会の価値観に従わなければ、自己価値の承認は得られない。そのため、自由を求める一方で、ある程度まで自己を抑制せざるを得ず、ふだんの自分は社会の価値観（社会規範）に合わせた「偽りの自分」にすぎない、「本当の自分」は社会に抑圧されている、と感じていたのである。

現在では、**D**は大きくゆらいでいるため、社会の抑圧性はあまり感じなくなっている。そのため、自由に行動する可能性は確実に広がっている一方で、何をすれば社会に認められるのか、誰もが認めるような価値ある行為とは何なのか、その規準が不透明になっている。形骸化した**D**に準じて行動しても、それを周囲が承認してくれるのか否か、あまり確信を持つことができないし、そこには承認の規準が見えない分だけ、強い承認不安が生じやすい。

こうした状況においては、周囲にいる人々（身近な人間）に認められるか否かが、より重要になってくる。自分の行為に価値があるのか、それを自分で確かめる参照枠がない以上、誰か適当な人間に確認してみるしか道はないからだ。

E

たとえば同じ職場で仕事の価値観を共有していても、ちょっとしたコミュニケーションの齟齬^{そご}や行き違いで、たちまち緊張関係が生じ、仲間はずれ、揶揄^{やゆ}、陰口、といった事態が生じてしまう。まして仲間や友だち関係のように、共有された価値観が最初から曖昧で流動的な場合、その都度の状況ごとに、相手が好む行為かどうか、仲間が共感してくれる行為かどうか、仲間の承認を維持する上で重要になる。

こうしていま、個人が葛藤する対象は「社会」から「身近な人間」へと移っている。そのため、親や所属集団など、身近な人々の言動に対する同調や迎合を繰り返す人も増えているのだが、こうした状況が長く続けば、周囲に迎合している自分に嫌気がさし、「偽りの自分」を演じているように感じられ、自分が本当は何をしたいのか、あらためて問い直すことになる。そして「本当の自分」でありたい、と強く願うようになる。

^F現代の「自分探し」は、こうした親や所属集団の抑圧から「本当の自分」を解放しようという試みであり、それは同時に、新たな承認の可能性を求める当所^{あてど}のない旅なのである。

（山竹伸二『「認められたい」の正体 承認不安の時代』講談社 二〇一一年より引用 問題作成の都合上一部変更）

問一 傍線部A「何といってもマルクス主義の影響力は大きく、歴史上類を見ないほど広範にわたっていた」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は 13。

- ① 第二次世界大戦中に全体主義を受け入れていた人々は、自責の念を持っていたから。
- ② 第二次世界大戦中に全体主義を受け入れていた人々は、信じていた価値観を否定したいと思ったから。
- ③ 第二次世界大戦で活力を失った人々は、マルクス主義が自国の社会主義体制を批判してくれると思ったから。
- ④ 第二次世界大戦で活力を失った人々は、マルクス主義が旧ソ連や東欧国だけでなく世界規模の運動になると思ったから。
- ⑤ 第二次世界大戦で活力を失った人々は、マルクス主義が悲惨な現状と将来への不安を解決してくれると思ったから。

問二 傍線部B「先進資本主義諸国に共通する傾向」とあるが、その内容として適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は 14。

- ① 伝統的な価値観の束縛が緩むと、人は自分の生き方を模索し始めるという傾向
- ② 自由に生きることができるようになると、人の暮らしに余裕ができるという傾向
- ③ 個人主義が強くなると、人はそれぞれの価値観を主張しあうようになる傾向
- ④ 自分の存在価値を見失うと、人は他者の承認も見失うという傾向
- ⑤ 価値観を見失いがちになると、人は伝統的価値観を個人化し相対化する傾向

問三 傍線部C「新たな『大きな物語』が登場し、敗戦によるニヒリズムを払拭することができた」という記述に関して、日本人

の価値観の変化を説明した文として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は 15。

- ① 一九七〇年代半ばに「大きな物語」は崩壊したが、その一方で、個人主義と価値観の相対化が社会全体に浸透した。一九八〇年代以降、高度消費社会に突入し生活にゆとりが生じた。現在は、豊かな生活を実現することが最重要課題となっている。
- ② 一九七〇年代半ばに「大きな物語」は崩壊した。一九八〇年代以降、価値観の相対化は好意的に受け止められたが、それは思想家によるものであったため、定着しなかった。現在は、誰もが認める価値ある行為の規準は不明瞭となっている。
- ③ 一九七〇年代半ばに「大きな物語」は崩壊したが、その一方で、個人主義と価値観の相対化が社会全体に浸透した。一九八〇年代以降、価値観の流動化が生じた。現在は、誰もが認める価値ある行為の規準は不明瞭となっている。
- ④ 一九七〇年代半ばに大きな影響力を持つ価値観は崩壊した。一九八〇年代以降に生じた承認不安は、バブルの崩壊後に深刻化した。現在は、誰もが認める価値ある行為の規準は不明瞭となっている。
- ⑤ 一九七〇年代半ばに大きな影響力を持つ価値観は崩壊した。一九八〇年代以降に生じた承認不安は、バブルの崩壊後に深刻化した。現在は、豊かな生活を実現することが最重要課題となっている。

問四 空欄部

D

に入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は

16

- ① 自由に生きる条件
- ② 自由の意識
- ③ 周囲の承認
- ④ 社会共通の価値観
- ⑤ 自己の抑制

問五 空欄部 E には、次の枠内のイ～へで構成された文章が入る。論旨が通る順に並べ替えたものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 17。

イ そのため、たとえ身近な人間に認められなくとも、自らの行為の価値を信じてきたはずだ。
ロ だが現在の日本社会では、身近な人間の承認は社会共通の価値観とは関係なく、身近な人間同士で共有された独自の価値観が承認の規準になっている。

ハ しかもそれに加えて、相手の気分を敏感に察知し、場の空気を読み、柔軟に相手の言動に合わせることも必要になる。
ニ 無論、社会共通の価値観が浸透していた時代においても、身近な人間に認められるか否かは誰もが気にかけていただろう。

ホ なぜなら、身近な人間は顔の見える相手であり、共有された価値観のほかにも、さまざまな感性や考え方を示しあうことになるので、その微妙な違いが表面化しやすいからである。

ヘ しかしそのような時代には、自分の行為に価値があるか否かは、社会共通の価値観に照らし合わせてみれば確認できた。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | ロ | ↓ | ホ | ↓ | ハ | ↓ | ニ | ↓ | ヘ | ↓ | イ |
| ② | ロ | ↓ | ハ | ↓ | ホ | ↓ | ニ | ↓ | イ | ↓ | ヘ |
| ③ | ニ | ↓ | ホ | ↓ | ハ | ↓ | ヘ | ↓ | ロ | ↓ | イ |
| ④ | ニ | ↓ | ハ | ↓ | ホ | ↓ | ヘ | ↓ | イ | ↓ | ロ |
| ⑤ | ニ | ↓ | ヘ | ↓ | イ | ↓ | ロ | ↓ | ハ | ↓ | ホ |

問六

傍線部F「現代の『自分探し』は、こうした親や所属集団の抑圧から『本当の自分』を解放しようという試み」であると筆者が考える理由は何か。空欄部に五十字以内で記しなさい。ただし、「偽りの自分」「本当の自分」という言葉を必ず用いること。解答は**国語解答用紙**。

五十字以内
から。

① 敗戦した後、日本の新たな価値観はマルクス主義と戦後民主主義になり、当時の「大きな物語」は、高度経済成長を背景にした便利で快適な生活の実現だった。マルクス主義の影響で人々の豊かな生活は実現したが、生活が豊かになったので革命の必要性が消えて、マルクス主義も理想ではなくなった。

② 日本が高度消費社会に入ると、個人は自分なりの価値観で自由に生きればよいという考えが広まった。これをニヒリズムという。ポストモダンという現代思想も、この考えを後押しした。ポストモダンの思想家は絶対的な価値観は存在しないと主張した。

③ 現代の日本社会には自由に生きる上での制約が少なくなったが、一方で、何をすれば認められるのか方向性が見えなくなった。これを筆者は、ニヒリズムと承認不安の蔓延という。人は自由になるために周囲に同調しがちになり、「自由と承認が葛藤」するようになった。

④ 現代日本では、「自由と承認の葛藤」は顕著になっている。「自由と承認の葛藤」は、かつては個人の自由と社会の承認の葛藤だった。社会の価値観に従わなければ自己の価値の承認も得られないので、生きる上での制約を得るために、社会では自己を抑制せざるを得なかった。

⑤ 近年、日本では社会の抑圧が弱まっている。そのため、何をすれば社会に認められるのかも確信が持てなくなってきた。加えて承認不安は強くなっているので、自分の行為に価値があるのか周囲にいる人々に確認するしか道がなくなっている。葛藤の対象は、身近な人々になった。

問八 次の①～⑤の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は 19 ～ 21。

1 ハン|ヨウ性の高い技術が使用されている。 19

- ① 反 ② 判 ③ 汎 ④ 範 ⑤ 煩

2 シ|セイに生きる人々の生活を知る。 20

- ① 市 ② 私 ③ 至 ④ 施 ⑤ 自

3 ジン|ソクに問題を解決する。 21

- ① 即 ② 早 ③ 則 ④ 捉 ⑤ 速

問九 次の問いに答えなさい。 解答番号は 22 ～ 24。

1 傍線部の四字熟語の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 22

一日千秋の想い。

- ① 非常に清々しい
② 非常に不安
③ 非常に懐かしい
④ 非常に怖い
⑤ 非常に待ち遠しい

2 作品名と作者名の組み合わせが不適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

23

① 羅生門―芥川龍之介

② 暗夜行路―志賀直哉

③ 伊豆の踊子―川端康成

④ 山椒魚―太宰治

⑤ 二十四の瞳―壺井栄

3 傍線部の敬語の使用方法が不適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

24

① 先生が講義室にいらつしやる。

② 先生が講義室においでになられる。

③ 先生が書物をくださる。

④ 先生が書物をお持ちになる。

⑤ 先生が書物をご覧になる。